

白山ふるさと文学賞

第五回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

黄色いひまわりとの思い出

笠間中学校二年

鳥越 とりごえ

真由 まゆ

熊の住む森、山。のどかな田舎村。あたり一面の田んぼ。黄色いひまわりや青々しい草花。優しい鳥のさえずりがきこえてくる。どこかの田んぼ道から「ふるさと」の歌がきこえてくる。どこからか、「おかえり」「ただいま」という声がある。僕たちの出会った場所がある。これは僕たちとひまわりの思い出を描いた物語だ。

僕の名前は森岡祐二。月熊小学校五年生。毎日を平凡とすごしている。ある日僕は、ひまわりと出会った。

キーンコーンカーンコーン。いつものように最後のベルが鳴った。僕はランドセルをかつぎ、五年二組の教室を出た。

「ゆう！」

名前を呼ばれ、僕はふり向いた。そうかけてきたのは、神本龍也。通称たつや。スナック菓子が好きで、新しいスナック菓子はいつもネットでチェックしている。

「いっしょに帰ろうぜ」

「うん。いいよ」

帰り道、たつやが言った。

「なあ。けんちゃんって変じゃね？」

「うん。そうだよ」

そんなの分かりきってることだ。けんちゃんの変。でも、おもしろい。けんちゃんの行動や、言動がおもしろいとかじゃなくて、けんちゃん自体がおもしろい。

「なんかさー。今日、けんちゃんいろいろやばかった」

「うーん。今日は変じゃなくて、おもしろかった」

*

時は、今日の二時間目。算数の時間だ。明坂秀太郎―明坂先生が、けんちゃんを52ページの問4の(2)を当てた時だ。けんちゃんの出席番号は13番。今日は7月13日。明坂先生が黒板の方を向きながら、けんちゃん

んの名前を呼んだ。しかし応答はない。近くの女子が言った。

「先生。けんちゃんいません」

「え」

先生がふり返るとみんなも一斉にけんちゃんの席を見た。けんちゃんの姿はない。筆箱は置いてあり、ノートと教科書は開いている。52ページの問題は全て問いてある。

「おかしいですね。授業の始まった時はいたんですが…」

けんちゃんの席は一番後ろの廊下側。みんな気づくはずがない。

「まだですか」

先生は普通につぶやく。けんちゃんはときどきいなくなる。次の授業までには、いつの間にか帰ってくる。でも、いくら生徒玄関の前で待っても、けんちゃんが生徒玄関から帰ってきたところを誰も見たことがなかった。けんちゃんがいつ、どこから帰ってくるのかは、誰も分からな。けんちゃんのげた箱を見ても意味はない。なぜならけんちゃんの内ばきズックと、外ばきズックは同じだからだ。内ばきズックのがかっこいいと言って、どちらも、ひもの内ばきズックでそろえてあるのだ。

「しかたないですね」

そう言っ先生は、けんちゃんの52ページの問題の丸つけをした。全問正解だ。教科書の難しい問題だって、スラスラとけんちゃんは解いてしまう。つまり、けんちゃんは頭がいいのだ。そんなこんなをしてるうちに、授業の残り時間が25分になった。先生が黒板の方を向いて、52ページの答えを書きはじめた。

「ここが分からない人はいますかああ!？」

先生がこちらをふり向いた時、先生の顔はとておどろいていた。いつもなら次の授業までに帰ってくるのだが、今日はちがった。けんちゃんは何事もなかったかのように、席に座っていたのだ。

「先生、丸つけ、ありがとうございます。びっくさせてすみません。お気になさらず進めてください」

(気になってしかたがないよ：)
その場にいる全員がそう思った。そのまま二時間目が終わってしまった。

*

「本当におかしかったよなあ」

「うん。今日はおもしろかった」

二人で今日の事をはなしている時、

「僕のことをはなしてたの？」

「つぎやああああ!!」

後から声が出たから、思わず二人でさげんでしまった。後ろに立っていたのは、けんちゃんだった。

「おい！いきなりやめろよな！」

「ごめん…」

彼の名前は、日片建ひしがたけん。通称けんちゃん。みんなは不思議ちゃんって言うけど、僕は、おもしろいと思う。

「お前って、ほんと不思議だよな」

「そう…？」

「ちよっと！」

いきなり怒った声が出た。三人でふと前を見るとそこには、ツインテールで腰に手をあて、仁王立ちをした女の子と、そのとなりには、物静かにこちらを見ている女の子がいた。

「たつや！私のげた箱にミミズ入れたの、あんたでしょ！」

「あ、やべ」

「次やったら、許さないんだから！」

「メンゴメンゴ。でも、見逃すオメーもオメーだよな」

「何？今、やってほしいの？」

「あ、いいです」

「ほんとにもう…」

彼女は、桐谷綾きりたにあや。この通り、気が強く、短気な女の子。合気道を習って

いて、怒らせたらヤバイ。

「ちよっと、あやちゃん…!!」

桐谷をなごませるようにしている彼女の名は、入山日美子いりやまひみこ。物静かな女の子。この月熊村の中でもお金持ちのほうで、小一の時、都会の方から引越してきた。彼女に聞かるとすごいとかなんとか。

「ねえ、けんちゃんに聞きたいんだけど。今日、二時間目の途中何してたの？」

「いろんなこと」

「へえ」

「え、気になる。教えてよ」

「いいじゃん別に」

「あ」

僕はひまわり畑の近くで、何か茶色の動物を見つけた。

「どうしたの？」

「あそこ」

僕が指をさした方向にかけよると、そこには、一匹の子犬が寝転んでいた。

「柴犬だ」

「かわいい」

「どうしたのかな？」

「あ！見て」

桐谷が柴犬の右足を指さした。

「けがしてる」

「本当だ」

「なあ、思ったんだけどさあ」

たつやが何か思いついたように言った。

「こいつ、飼い主いねえんじやねえか？」

「え…」

「野良犬ってこと？」

「うん」

たしかにこの地域では野良犬が多い。最近では、野良犬を保護したり、自分で飼ったりしている人も多くなり、野良犬は減ってきた。

「だからさ、俺らで、保護しねえか？」

「はあ!？」

「保護施設に預けようよ」

「私も。動物愛護センターとかに預ければ、愛護してくれるんでしょ？」

「ちがうよ」

けんちゃんも口を開いた。

「ちがうって…。その名の通り、動物をちゃんと保護してくれるんでしょ？」

「ううん。動物愛護センターは、その名の通り、桐谷みたいに、そう、保護してくれるって勘違いしてる人が多いんだ。最初は保護してくれるけど、一定の期間がすぎたら、最後には殺処分されちゃうんだよ」

「殺処分って…」

「だから僕は、僕たちで、できるかぎり保護して、飼い主を探した方がいいと思うんだ。この子犬を、ドリームボックスに入れるってことだけはしたくない」

「そうね。私たちが保護するってなったら、期間なんてないもんね」

「そうだね」

「うん。そうかも」

「よし！これでみんなの意見がまとまったな」

みんなも、笑い合うと、けんちゃんが言った。

「あ、まって！保護はいいけど、どこで保護するの!？」

「あー！考えてなかった!」

「まあまあ。おちつけよ。そんなことくらい考えてあるって」

たつやが、ニッと笑った。

「それより、この子の足を…」

「よし！僕の家においでよ!」

けんちゃんが言った。

「僕んちは、動物病院やつてるんだから!」

「そうだったね」

「よし、行こう!」

「うーん」

「どう？お父さん」

「少しけがしてるだけ。大丈夫だよ。疲れきって寝てるんだよ」

「良かった」

五人は、とても安心したように、息をほく。

「ところでこの犬、どうしたんだい？」

「ひまわり畑のところ、寝転んでたんです」

僕は今までのことを話した。

「そうか…。かわいそうに。この犬は、元飼い犬だったんだらうね」

「え。そうなんですか？」

「うん。首のところに、首輪のあとがある」

「捨て犬だったんだ…」

「君たちで保護するのはいいことだよ。ここは都会じゃないし、楽だと

思うよ。でも、どこで保護するんだい？」

「まかせてください！もう考えてあるんです」

たつやがドヤ顔で答えた。

「そうかい。それは安心だ。何かあったら、また来るといい」

「はい！ありがとうございます!」

「ありがとう！お父さん」

「いってらっしゃい」

「で、どこなのよ？」

「まあまあ」

「怒られない場所でしょうね？」

「それは、保証するよ」

「信じられないけど…。で、どうして学校の前にいるの？」

「学校だから」

「何が？学校だから何？」

「だから、保護する場所が、学校なんだよ」

「はあ!？」

「何いつてるの、たつや」

「お前、大丈夫か？」

「んだよ! ついてこい!」

「ええー…」

「ここだよ、(ここ)」

「非常階段…？」

「今日の昼休み、先生に怒られて、話の途中で逃げてやったんだよ。そしたらさ、普段は鍵かけられてるのに、今日は開いてたんだよ」

「あ…」

「?どうしたの、けんちゃん？」

「あ、いや…」

「?まあ、それでさ、そこに逃げこんだらさ、まったく見つからなかったんだよ。そしたら、またまたラッキーなこと…:よいしよつと」

「チャリ…。たつやは、非常階段に行くためのドアの横の石油ファンヒーターの後ろに手をつっこんだ。出てきたのは、鍵だった。」

「見ろよ。非常階段へのドアの鍵だぜ。俺すごくね？」

「なっ。どうやって見つけたのよ？」

「先生いったかなーって思ってたよ、ファンヒーターのどこ

ろで、光るものが見えたんだ。何かと思って取ったら、まさかのコイツがフックにかかってたってわけ」

「たつやすごいな!」

「思わず僕は声を上げた。」

「だろ。まあそれでその後、俺は親切に、鍵かけて教室に行っただけ」

「ガチャ…。たつやはドアを開けた。」

「私、ここ入るの初めて!」

「僕も」

「私も…」

「ここに隠しときや、なんともないだろ」

「まあ、そうかも…」

「よし!もう大丈夫」

「そう言ってる、けんちゃんは、柴犬をおろし、ポケットに手をつっこんだ。」

「これ、ドッグフード…」

「どうしてもってるの？」

「うん、まあ…」

「そう言っていた、最中、柴犬から鳴き声でした。」

「クウ〜ン」

「あっ起きた!」

「子犬はよろよろと立ち上がり、僕らを見た。最初はびっくりしていた様子だったけれど、なぜかすぐなれた。」

「はい。ドッグフードだよ」

「コリコリ。子犬はドッグフードを食べた。」

「かんわい〜」

「キャンキャン」

「しばらくじゃれ合っている時、けんちゃんは言った。」

「名前決めようよ」

「いいね」

「俺、考えたんだ」

僕たち4人は期待の眼差しで、たつやを見つめた。

「その名も：ヒマワリ坊や！」

「うわあ。ひでえ…」

「ネーミングセンスなすぎ…」

「なんだよ！お前らも何か言ってみろよ！」

「私は、くるみちゃんがいいと思う！目がくるみの様に大きいから！」

「いや、くるみほどじゃねえだろ。あと、なんなんだよその、アニメに出てきそうな名前はよお」

「アニメをバカにするなよな！」

言い忘れてた。けんちゃんはアニメだ。

「いや、バカにはしてねえけどよ…」

「きいちゃん」

僕は、ひらめいた名前を言ってみた。

「え…？」

「黄色いひまわりのそばにいたから、きいちゃん」

「私もそれがいい」

入山が言った。

「私のじゃないのは気に入らないけど、一番まともな気がしてきたわ」

「俺のがかっこいいけど、2人ともそう言うなら、それでいいよ」

「よし、お前の名前は、きいだぞ」

「きい」

「きいちゃん」

「ワン！」

きいは元氣よく返事した。ひととおり遊んだ後、僕たちは、保健室から持ってきた毛布を置いて、今日はきいとこのくらいでと、さよならした。

「でもびっくり。あんなすぐなつくなんて」

「これからが楽しみだね」

「あ！」

けんちゃんが何かを見つけたように走っていった。僕たちも追いかける。

「どうしたの？けんちゃん」

けんちゃんは、一匹の子犬をなでていた。

「ワンワン！」

うれしそうに、子犬は、ほえていた。

「あっ…」

けんちゃんは少し、寂しそうな顔をした。

「どうしたの？」

その子犬は首輪をつけていた。

「じゃあな。いい子にするんだぞ」

ワンー！

「あの犬と仲良いのね、けんちゃん」

「まあね…」

僕は察した。だからけんちゃんに聞いてみた。

「けんちゃん。もしかして毎回授業中に出て行ったのって、あの犬に会いに行くためだった？」

「うん」

「犬に会いに行ってたの!？」

「そうだよ。僕はあいつを登校中見つけたんだ。だから、2時間目の休み時間、毎回非常階段から下りて、外へ出て、あの犬に会ってたんだ。」

かわいそうだったからね。だからあいつのために僕は寝どこを用意した。

ドッグフードも毎日持ってきて。でも今日、あいつはいなかった。周りを探したけどいなかった。たぶんあいつは、優しい人に連れられたんだ

なって思った。だから今日は帰ってくるの早かったんだよ」

「それで、その犬は、さっきの犬か…」

「だから今日、鍵開いてたのか…！」

「うん。閉め忘れちゃった」

「鍵はどうやって見つけたの？」

「先生が鍵あるか点検してるの見た」

「へえ。じゃあ今日、きいちゃんにあげたドッグフードって…」

「うん。あいつにあげる予定だったやつ」

「でもさ、そこまであの犬見てたんなら、飼えばよかったじゃん？」

「知ってるだろ？僕、もう犬飼ってるんだから。四匹目はさすがに…」

「あー。そうだった」

「じゃあな」

「ばいばい」

「またね」

「ばいばい！」

「それじゃ…」

僕たちは、それぞれの家へ帰った。みんなの頭の中は、きいのことについてばいだった。

僕たちは、きいと毎日楽しく過ごした。

「ねえ、クラスの、いや、五年みんな育てようよ」

ある時、桐谷はそう言った。

「まあ、いいんじゃない？」

僕たちは賛成した。クラスに呼びかけた。みんな最初はとまどっていたものの、力をかしてくれた。楽しく過ごしていたはずだった。

「今から学年集会があります。皆さん並んでください」

明坂先生が言った。

「何だろうなー？」

五年生がぞろぞろと廊下へ出る。

「先生たちに、隠していることはありませんか？」

先生はいきなり聞いてきた。ざわつき始めた。

「山下先生。それはどういう意味ですか？」

一組の女子が言った。

「あなたたち全員に対してです」

先生は、体育館を出て、一匹の犬を連れてきた。きいだった。

*

「みんな、聞いてくれ！」

たつやが靴をぬぎ、五年一組の教卓の上に立った。

「俺たち五人は、一匹の犬を非常階段で飼っている。犬の名前はきい。

ひまわり畑の近くで、寝転んでいたんだ」

ざわつき始めた。そりゃあ、びっくりするだろう。

「しかも、きいは捨て犬なんだ！でもとつてもかわいいんだぜ」

僕は思った。たつやが、「かわいいんだぜ」なんて言うと思わなかった。意外とかわいいところあるじゃないか。

「それで、俺たちで考えたんだ。五年生全員で育ててみないかって。みんなも協力してくれ」

みんな困っていた。一人の男子が言った。

「ばれないの？」

「大丈夫！もう連れて来て一週間経つ。ばれてない！」

たつやはドヤ顔だった。

「捨てられたなんてかわいそう…」

「私の家、犬飼ったらダメだから、うれしいかも…！」

意見はまとまったみたいだ。それでも反抗する子もいた。その子たちはもうほうっておいた。次のクラスへ行く時に、桐谷は、

「先生に言ったらゆるさないんだから。みんなできいを育てるのよ。先

生に言ったら、私、合気道、ぶちかましてやってもいいわよ」

と、反抗する子たちの耳もとで小声でささやいた。その子たちは、分かった…と、少しこわがっていた。先生に、「私たちが先生に言ったっていうこと、言わないでください。名前出さないで」といったところで無だ。桐谷は友達が多い。下の学年でも、一つ上の六年生にも、何十人も知りあいがある。桐谷には多くの情報が回ってくる。そんなことみんな知っていた。だれも先生に言おうなんて考えもしなくなつた。

「みんなも。先生には言わないでね？」

桐谷は一組を出る時、大きな声で言った。他のクラスでも同じことを言った。みんな賛成してくれた。

*

どうして先生にばれたんだ？だれかが言ったのか？そんなに桐谷の合気道をくらいたいのか？僕はさとした。そいつ、Mなんじゃないのか、と。いや、自信があるだけか。それにしろ、きいはばれた。どうなるんだ？

「この犬、心当たりのある人は？」

どんだんざわつく。どうするの？とか、不安そうなみんなの声が聞こえてくる。

「この犬は、非常階段の点検で発見された」

ばれたんならきいはどうすんだよ。いろんな不安が聞こえてくる。でもひとまず、誰もちくつてないらしい。良かった。誰も傷つかない。

「俺です」

みんなの視線が彼に向く。たつやだ。

「はい！僕もです！」

僕もすかさず立ちあがる。

「私も！」

「僕も！」

「わ、私も…」

続いて桐谷、けんちゃん入山も立ち上がる。すると、五年全体が立ち上がる。反抗していたものの、後から入ってきたのもいた。反抗していた子たちの半数が立ち上がる。その半分も立ち上がった。「知っていたのに教えたり、だまっていた僕らも悪い」と、あやまりながら立つ子もいた。「そうですか…。ではみなさん全員悪いんですね。でも、やっていいことと悪いことのちがいくらい、主張できる人たちはいなかっただけか！」

山下先生が怒った。

「まあまあ」

そこに現われたのは明坂先生だった。

「明坂先生…」

「みなさん仲良く育てたんですよ。悪いことかもしれませんが、怒らなくてやってください」

明坂先生がほほえむ。

「みなさんは確かに、学校で犬を飼うという、勝手な行動をしてしまいました。でも犬を保護するのはいいことです。どうでしょう？もう二度と学校で勝手に飼わないのであれば、学校の外とかは…」

「それがいいよ！」

「そうしよう！」

みんなの意見がまとまった。

「ありがとう、明坂先生！」

「はいいえ。でも保護ですから、飼い主を見つかるまでですよね？」

「はい、そうです」

「何かポスターなどは貼っていますか？」

「あつ…してないです…」

「それでは意味がありませんねえ…。では一つ、ポスター作りましょうか？」

「作ろうよ！」

みんな楽しそうだった。

「なかなか見つからないな……
たつやが言った。」

「どうしようか……」

僕もなやんでいた。飼い主がなかなか見つからないのだ。

「後少し、がんばろう！」

「ただいまー」

「おかえり」

母の声が聞こえた。

「飼い主は見つかった？」

「うん。まだ」

「そう……。そういえば、そのきいちちゃんって犬のことなんだけど……飼い主、見つかったわよ」

「えっ!？」

僕はびつくりした。

*

ガタンゴトン。電車がゆれる。僕はイヤホンを耳につけて、音楽を聞いていた。僕の名前は、森岡祐二。〇〇会社の社員。毎日を平凡と過ごしている。結婚したいな……と少し思っている二十四歳。電車の中は静かだ。都会を過ぎ、田舎に向かっていている最中なのだから、人はあまりいない。電車にゆられ、今から向かう、自分の故郷、月熊村であった昔の思い出。五年生の時だ。思い出しているうちに、ねむくなってきたな。そういえば、よく、みんなで保護してた子犬のこと、いつも元気で明るいから、ひまわりみたいだねって話してたけ……。

プシュー。僕は駅を出る。今さらだけど、二十四で僕という一人称はなんだか自分でも気が引けるような気がする。実家を目指し歩いている

時、どこからか「ふるさと」の歌が聞こえてきた。なつかしい。

そういえばあの時はびつくりした。保護してた犬、きいの飼い主が見つかったって言われた時。まあ、そんなことを思ってるうちに家が見えてきた。何も変わってないな。あたりを見回す。ひさびさの会社の休みだ。思いっきり、ゴロゴロしてやる。

*

「誰？きいの飼い主って？」

「ふふ。お父さんがね……」

「えっ！お父さん!？」

仕事でいそがしい父が帰ってきていた。

「ゆうじ！元気にしてたか？」

「うん!」

「それでな、家に来る途中、きいっていう名前の柴犬のポスターがあった……。どうせなら、飼わないか？」

「え……」

「お前の小学校のだろ？かわいいそうだし、お前にもなついてるんじゃないか？」

「本当に……!？」

「ああ」

「やったー!」

*

「ふふっ」

あの時はうれしかった。

「あっ」

家の前に来たとき、家の方から何かをかけてくる。

「あい変わらずだな」

僕たちにとってのひまわりがこちらにかけてくる。

「ワン!」

「ただいま、きい」